

《ファルスタッフ》の「喜劇」のお話

2021/11/26



今日も、良いお天気です。コロナ禍も終熄に向かいつつあるようです。嬉しいです。明日は、オペラサロン開催の日です。ヴェルディの喜劇《ファルスタッフ》の最終回です。オペラ史上最高のどんちゃん騒ぎが始まります。お楽しみにお出かけください。

さて、明日の《ファルスタッフ》ですが、最後はウィンザーの公園(一名ハーンの櫛の森)が舞台です。10月31日のハロウイーンの夜に、この森では、猟師ハーンの幽霊を先頭に沢山の魔女やオバケや妖精たちが現れて大宴会を開くと言われていました。その森に、真夜中、ファルスタッフはご夫人たちの策略によって誘い出されました。ここで、恐ろしい魔女や幽霊や妖精たちに扮した街の人たちの「ハロウイーン・パーティ」が開かれます。ファルスタッフは、散々に痛めつけられ、脅かされ、バカにされてしまいます。集まってきたウィンザーの街の人たちは、大笑いです。最後には、いかなお人好しのファルスタッフでも怒り出します。それで、お金持ちで街の有力者のフォード氏が、ファルスタッフをなだめるために、自腹を切って、ファルスタッフをはじめ街の人たち全員を招いて大宴会を開くことにしました。むろん主賓

はファルスタッフです。途端にファルスタッフのご機嫌が直ります。さあ、本当のハロウィン・パーティが始まって、街中の人たちの心が一挙に一つになります。めでたし、めでたしです。いかなるオペラも、最後はハッピーエンディングで終わる「喜劇」でなければなりません。

実は、演劇でもオペラでも、お芝居はすべて、全員が幸せになる「喜劇」でなければならないと、私は思うです。すなわち、「悲劇」は、すべて、「未完の喜劇」です。「悲劇」は、終わり10分で喜劇になるのです。終わり10分を欠いた喜劇が悲劇なのだ — というのが私の「悲劇喜劇論」です。では、「悲劇」はどこにもないのかといえ、ただ一つだけ、「悲劇」はあるのです。ただ一つだけです。どの、お話でしょうか？ そのことは、明日、《ファルスタッフ》の最後でいたします。お楽しみに。このまま無事、クリスマスとお正月が迎えられるように……。

都築正道

冒頭のカットは、METの《ファルスタッフ》です。METの演出では、最後のシーンを、わざわざヴェルディの原作のウインザーの森から、わざとフォード氏のパーティの場に代えています。これが《ファルスタッフ》の真相を語るものです。さすがMETです。最高です。